



18年間で身につけた 大槌（ハンマー）

3年A組 佐々木 真尋


自己紹介


大槌町金澤出身
大槌学園→大槌高校

部活 総合文化部
はま研究会、復興研究会

18年で身につけた大槌（ハンマー）

広げていく
樹の根っこ力

- 
- ①木の根のように深く物事を考える。探究する。
 - ②問いと結果の関連付け、様々な分野を関連させる。



マイプロジェクトで土砂災害を
テーマに進めたとき。

マイプロジェクトを始める前の の自分

→自分で物事を設定して行うことが苦手で、何をやるにしても行き詰っていた。

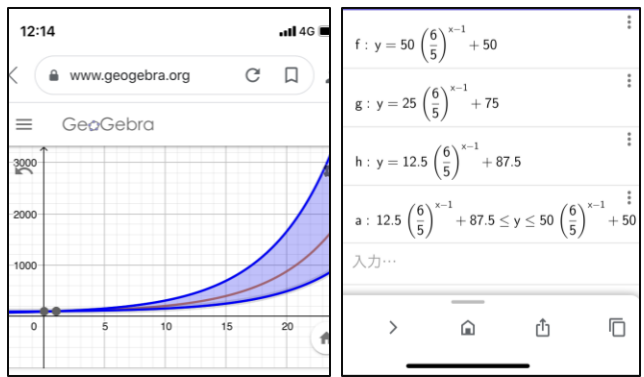
私が高校時代に行った探究①(鹿の頭数シミュレーション)

課題設定 大槻町内の鹿を適正な数にするのに必要なハンターの数はどの程度だと推定できるか

推定方法

	シミュレーション	大槻町
初期頭数(初項)	100頭	5,000頭
出生率	1.5倍	1.5倍
自然死	2割	2割
年間捕獲頭数	20頭 (2割)	1,000頭 (2割)
必要なハンター数	1人	50人 (現状29人)

結果考察 ハンターの数は現状不足しているが、簡単に増やすことができるわけではない。



鹿の頭数シミュレーションを行うことはできたが、防災の機能を持つ森林資源の維持には鹿の捕獲以外の方法を検討する必要がある

私が高校時代に行った探究②(森林機能に関する大学の先生へのヒアリング)

ヒアリング 内容



岩手大学農学部 山本先生

シカの頭数管理をするには補償金がかかり、政策とも密接に関わってくるところであり、ハンターの育成も政策の視点を保つ必要がある。



岩手大学農学部 伊藤先生

確かに森林の機能は、腐植のもつ保水力によって河川への急激な流出を抑制することもあるが限定的な効果である。また森林から出た流木によって被害が拡大する例もあり、必ずしも森林が効果があるとは言えない。

結果 考察

鹿による森林への影響は確かに出てはいるが、森林機能だけでは土砂災害や洪水は防ぐことができないのではないかと。

森林資源だけに頼ることのない防災の方法について
改めて検討を行う必要がある。



どのように変化したか

→自分で調べたいことを
定められるようになった。

→好奇心が生まれ学んでいくこと
に少しずつ楽しさも出てきた。

私が見つけた知見

思い込みではなく
データに基づいた判断が大切

土砂災害の調査

過去や現在の様々なデータを参考にした



タコの生態調査では... 長期間の記録から発表



卒業後の目標

岩手大学に入学して土砂災害のメカニズムなどを学び、避難者を手助けできるハザードマップを制作したい。

ご静聴ありがとうございました